WASON HQ 1104 J74+
Jan. 1894
No 363

明治十八年初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第三百六十三號

要目

隨感八則
良人に仕ふるは屈從にあらず
妻に威張るは英雄にあらず
あだ涙は淺き瀨に限らず
雲路たづぬる人もあらず
形骸こそ枯木なれ
花散りなばさ
大閤もちの妻
良婢なき所以
孤兒院への義捐
ペスタロヂと女性
淨瑠璃史を讀む
逸事三則
春畝伯、下田歌子に一言を送る
加藤さし子、米國にちよいさ行く
德富蘇峯氏の母、會頭を辭す

明治二十七年一月二十日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百六十三號目錄

社說
孤兒院への義捐（其二）

隨感
貞婦なき所以
良人に仕ふるは屈從にあらず
妻に威張るは英雄にあらず
太閤もちの妻
花散りなばと
あだ涙は淺き瀨に限らず
雲路たづぬる人もあらず
形骸こそ枯木なれ

女學
女學校々舍の建築と女生の儉德

逸事
春畝伯、下田歌子に一言を送る
加藤とし子、ちよいと亞米利加に行く
德富久子、會頭を辭するの詞

統計
男子の女子より多く生るゝ理由
小學校學齡修學不修學

雜錄
幼稚園の有無
撰擧競爭前のクリーブランド
クリーブランドは政畧家にあらず
左れど政事組織に全く冷淡ならず

理學
遊星の空話（其二）

書架
淨瑠璃史を讀む（秀野生）

史傳
ペスタローヂと女性（鷗村生）

片々
蠶繭防腐法の發明
節温燈爐と二重竈

時報
◎敎育○文部省の訓令○興仁協會○女學校設立○實習女學校◎美談○孝女賞金を受く○一對の孝女◎風紀○不潔費消高○常廓は移るに如かず◎片々○婚姻の奇習○參誓矯風會

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百六十三號

明治二十七年一月二十日發兌

社説

孤兒院への義捐

其二

孤兒院へ對する現在の寄附金を倍蓰すとも、もし其方を盡し其道を備えて、之を義捐するにあらずんば、折角の好意も空しく達せず、院内の永遠深長なる欠典は、遂に長く補充せらるゝとある可らず。よりて、ひそかに愚存を運らすに、之を救濟改良の方案たるや先以て、

義捐は、錢と、食物と、衣服の類のみに限るべからず。力を盡し、心を勞するとも、亦た殊勝にして且つ有効の義捐たる事。

義捐は、單に孤兒が衣食の爲のみにすべからず、義捐者が當時もつとも必要なりと感じ、就中尤とも望ましと見込みたる特別の入用に對し、條件を附して、寄進す可き事。

を辨まへ、一層信切なる、一段注意したる念慮を以て、義捐を爲さんと、是れ也。

難者ありて曰く、かの孤兒院へ義捐する仁人は、必らずしも、一身に過多の余裕ある人々にはあらず。無告の孤兒、之を鞠育すべき天與の父母なくして、やゝともすれば則はち餓えて死なんとするとを氣遣ひ、當坐の必迫に感動して、敢て一粒の米飯を半粒に減じ、辛苦克己して、やうやく之に義捐するもの也。左れば、孤兒なるものは、只だ餓えて死せざれば可なり、其以上は、有志の人ありて暇ごとに相應の教育を之れに施こして可なり。何の余裕ありてか、更に其以上を望むべけんや。義捐者當人に於てすら、僅かに能く其日を凌ぎ辛ふ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

じて尋常の生計を爲すなり、未だ以て永遠長久の用意を計るヿ能わざるに、安くんぞ獨り孤兒院の爲めに先んじて之を備ゆるヿを要とすべけんやと。

此の辨難には、一應の道理ありとす。左ればこそ、孤兒院の當局者は、尋常の寄附金を用ひて、永遠深長の欠典を補充するが爲めに支辨するヿ能はず、單に以て日用切迫の入目にのみ充つるの外なき所以にてあるなれ。

レプタ二つ三つの尋常の寄附金には、前に述べたる如き不自由の間だより出でたる特志非常のもの多かるべく、必竟、當坐の切迫を見込みての義捐ならんが故に、此等は單に衣食の料にのみ使用すべし。たとひ殘余ありとも、根本的の料目に流用するヿあるべからず。

茲に至りて、ますます知らるゝは、別途特別の寄附金ありて、或る條件をそえての義捐なるもの備はるにあらずば、孤兒院なるものは、永久堅固の基礎に安んずるヿ能はず、斷えず汎々として水上の城の如く、其役者も亦た瓢々として浮草の定めなきが如き憾み、なきにしもあらじと惟ふ。

故に、吾人は、方今孤兒院への義捐に、前に掲げたる二要目を念じ、特別の趣構を懷きたる寄附者が續々として世に顯われんヿを要め望むや、切なり。

例せば、孤兒院内の敎育資金の爲めと云ひ、又は、書籍器械の爲めと云ひ、又は、職業部の資本の爲めと云ひ、又は、孤兒獨立の時の資本の爲めと云ひ、若くは、院内役者の滋養の爲めと云ひ、又は、役者中衰老者の準備金の爲めと云ふが如く、それぞれ特別の目的を定め、單に此の目的の爲めに義捐すと云ひて之を寄附し、何如に日用の入費に切迫すとも決して之を流用するヿを許さず、彼の「一錢も借金せず」と云へる憲法を此所ろにも厲行して、たとひ別途の積金ありとも、衣食の爲め尋常寄附金にして足らずんば、則はち餓えて死すべきなりとの決心を搖動せしむるヿなくんば、紀律嚴として孤兒院維持の大精神、軟化するヿあるまじ。

而して、此等さまざまの特別なる目的に對する義捐金を募集するには、先づ、其募集の爲めに力を盡し心を勞するヿを決心すべき一種の献身者、院外に起りて率先唱導し、以て募り、以て集め、好く管理し、正しく使用するヿを肝要とす。風の一隅より吹起り、波の一點より紋を織出すヿの如く、大凡そ一事

業は、一人物の熱烈なる主唱を以て勃興するものなり。天下幾多の人を動かして、よく之に同情を表せしむるを得べきや否やは、率先身を挺して之を主唱する人の誠意熱情如何んなるかに因由す。左れば、吾人は、彼のさま〲なる特別の目的に對する義捐金募集の事の、果して成効すべきや否やは暫らく問外に措き、先以て其募集と其管理とに適當すべき、至誠、熱情の主唱者ありやなしやに、專ぱら掛念心配せずんばあるべからず。

幸にして、此の適當なる主唱者を得ば、各途それ〲の義捐金を獲んこと、決して難からじ。今假りに二つの事例を擧げて、之を示さんに、茲に二人の熱心なる院外主唱者ありとせよ。而して一人は、孤女學院の爲めに、他の一人は、岡山孤兒院の爲に、心力を義捐すと假定せよ。孤女學院の爲にする人、先づ世に訴ふらく、抑そも孤女の教育は、婦女子に於て擔當すべき筈なり、日本の婦人微力なりとも、豈に唯一つの孤女學院を維持すること能はざらんやと。則はち、一方を案じて云く、此の主旨により、同志の婦人は、月々其家内の屑くづを賣つて義捐することとなさんと。又、岡山孤兒院の爲にする人も同樣絕叫して、其義捐の大部分を外國人に委頼するの恥かしきを說き、尙ほ、此院は、主として日本の男子にて維持すべしと勸告して、則はち一方を案ずらく、此主旨により、同志の男子は、每月其車代の一回分を義捐することとなさんと。前なるは、稱して、◎日本婦人紙屑義捐會とも云はんか。後なるは、◎日本男子車代義捐會とも云はんか。其會員たるもの、紙くづを始末して之を献げ、月一回歩行して其代金を義捨せんこと、敢て難事にあらずして而も甚はだ樂しきことなり。而して、之が爲めに、收入することを得べき概算、左表の如し、

紙屑義捐會

一家の紙屑代、每月平均二錢とし。百人にて、二圓。
千人にて二十圓。四千人にて、八十圓。

車代義捐會

一人の車代、一回分平均五錢とし、百人にて、五圓。
千人にて五十圓。八千人にて、四百圓。

夫れ、四千人とは、四百人の團躰十箇。八千人とは、八百人の團躰、十箇にあらずや。茲にもし十人の熱心なる同盟主唱者ありて、十ヶ所の都會に一人づゝ散在すとせば、一都會に

於て四百軒の婦人、もしくは、八百人の男子をして同情を表せしむると、決して至難の業とすべからず。幸にして、此案實行せらるれば、一の孤女學院、一の岡山孤兒院は、月々の出費悉皆を之によりて維持せらるべき也。

左れど、月々の出費悉皆を此方案によりて維持せんとは、吾人が初めより望みとせさる所ろなり。此方案によりて、或る特別の目的に對する入費、月數圓もしくは十數圓がほどを之によりて維持するとを得ば、則はち吾人が此篇に於て說ける所の精神は行われたる也。果して然らば、これ豈に實行の容易一段なる方案にはあらずや。

夫れ、紙くづ、車代の如きは、假りに一二の例を擧げたるに過ぎず。其他、

女學校の女生が、餘暇を義捐して裁縫、編物、狀袋、巻紙、などを製し、バザールを開きて、收益を寄附するか。

又は、小遣の內、一錢宛を義捐すとして、一錢會を設くるか。

一家の細君が、月に一度だけ、魚菜を廢し、其日かぎり、あわれなる孤女を懷ふて茶漬香の物にてすまし、其代料を義捐する、獻味會を組織するか。

葉書の効用たる、時間と入費とを儉し、贈者と受贈者との手數を省くと莫大なるに、方今の習慣とかく封書と葉書とを區別し、葉書の書信を畧式として、益もなき短文をわざ／＼封書となす。此習慣俄かに改ためがたきものゆへ、男子中有志者、葉書會など云へるを設け、此會員は兼ねて容赦を請ひて、可成く葉書の通信にて辨じ。毎月若干と定めて手ごゝろの義捐金を別に貯ふべし、彼の二法一元論の著者などは、葉書の利用にて世の諺草となりぬ。此趣構も亦注意すべきと也。

斯る類ひは、世上に廣大なる同志の友を得べきとを目的とし、專ら常識に訴へたる方案なるが、此外に尙ほ多くあるべし。

而して、外國人、又は本邦の富める人などは、

一株三十圓、乃至五十圓と定めたる孤兒立身資本なるものを義捐し、孤兒一人何某なるものを獨立せしむるの資本となし、其孤兒が一生涯に、之と、其報ひとなすべき同額の他の一株とを返呈し、以て永久增進の獨立資本をつくるとの如き一法。

に對しては、淺からぬ好意を與へらるべきことと信ず。又、職業部の資本金なるものは、尋常の義捐金と別途にせざれば、其義捐前、及び后に、種々の遺憾あるべきに付、

信用すべき適任の院外主唱者數名發起して、別途に職業部資金を募集し、管理し、院内孤兒が執行すべき職業に放資し、其收益の何分は、月々の經費の方に、他の何分は、云々の特別用にすべきことを憲法として、以てますます多く資金を募集する事、

も亦一方ならん歟。

此類の方案列擧すとも盡さじ。たゞ之を主唱し、之に熱中し、以て精神勞力の幾部を義捐すべき院外獻身者其人を得るを最大最初の要務となす。左れば、吾人は、右に假設したらんが如き事例を擧げ示すを以て此篇の本意となさず。方今、孤兒院への義捐法なるもの、甚はだ淡泊不用意にして、たゞ錢と、食物と、衣服の類のみを義捨すれば、則はち万事了ると認たむるもの多く、又、所云る獻身者なるものも、其身を院内に投ずるにあらずば、孤兒院への獻身は惣じて出來がたきものゝ如く速了し、折角の芳志ともに空しく効驗を失することの多き事實を見て、歎惜忍ぶこと能はず、敢て愚衷を吐露して、天下誠熱の孤兒の友に訴へ、以て其鬱勃たる經綸を聞かんことを促かし、亦以て其清高なる決意發表の時急に應ぜんことを要むと云爾。

因みに云く、孤兒院内の父母たる人にて、自から特別事業の爲の資本金を募集するは、今に方りては良策にあらずと信ず。何んとなれば、此の特別用の資本金と、尋常維持費との區別を明らかにすること難く、天下義捐者も、切迫の度合ひを目安にすること、甚はだ難ければ也。况してや、初め、特別用にとて募集したる金圓を、尋常の維持費に遣ひ棄つるが如きことありては、以ての外の至りなりとは云へ、院内要路の人にして躬から之に當るときは、勢ほひ斯る始末と相成らざるを得ず。これ、必らずしも其人々の弱志なるに由るにあらず。義捐金二途の區域明白ならずして、世人が之を見ることも亦た曖昧なれば、自から紀律振肅せざることあるにも由らんか。必竟、初に於て仕組みを案ずることの宜しきを得ざりしに職由すとこそ思はるれ。

隨感

○良婢なき所以

好き下婢の尠なきことを歎つ人は多かれど、之を好く使ふ主婦の更に尠なきことを悲しむ人は多からず。拙御の下に、良馬なく、亂用の下に名器あらず。主婦にして、善御、良用の道を辨まふるにあらずば、安くんぞ茲に殊勝なる婢女を得べけんや。左れど、好く使ふ主婦の更に尠なきことを悲しむ人は倘ほあれども、抑そも之を好使することの極めて至難なる所以を辨ずる人に至つては、殆んど無し。天下、事業多く、事業に、人、人を使ふの例めし多からずとせず。君の臣に於ける、臣の僕に於ける、僕の下郎に於ける、職長の雇夫に於ける、頭領の小方に於ける、其品、列擧するに堪へず。左れど、之と相接することの久しくして、朝々、夕々、昨今、今明、凡そ終日終月終年、斷えず相接することの間斷なき、而も、命令の微細に入り、服從の極微に渉ること、彼の主婦が下婢に於けるが如きもの、果して他に存することありや。惟んみるに、此れ唯一特異の別例なりとす。使役管督の法の難きこと、宜べなる哉。然るを、無學不覺悟の主婦、たゞ妄りに使用し、容赦なく管督し、自己は毫も長者たるの德器と修養となくして、尤とも勘辨なき不學の女輩を自儘に驅使せんとす。其難きことの太甚はだしき所以ん、これによりて知らるべし。

○良人に仕ふるは屈從にあらず

米國人の習はせを只管らに盲信し、賢夫人が從來執り來りしほどの處行をも、文明人の妻たるものが爲すまじきことと論じ、夫婦同等の權利論を、家内日々の事務の上にまで推し及ぼさんとするものあるこそ、歎かわしけれ。靴の塵を拂ひ、衣物の皺を伸し、亂したるをたゝみ、取出でたるを片付くることの如き、一見すれば、實に以て、希臘の奴隸の爲す務の如く、今の婢僕が任じて可ならんほどの事といへども、細君が甘んじて之を處置せんこと頗ぶる相應わし。これ決して低き事業にあらず。之に任ずるは其地位を下だすにもあらず。夫妻は分業すべし、互ひに相勞はるべし。其間、決して權利論を挿入

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

すべからず。只だ情を以て、相敬し、相仕へ、相慰さめ、相助くることを爲すべきなれ。左れば、終日外に役々として、塵にまみれ、泥にけがれたるを、切めてもの心やりとして、細君之を拂ひ、其皺みたるを伸して、勞苦を解き、其亂れたるを整へて、戸内主人たるの支配を遂ぐるは、寧ろ大滿足の事にあらずや。昔しは、良人外より歸れば、夫人之に茶一獻をさゝぐ。ひそかに以て其顏容をうかゞひ、外事の吉凶を察し且つ慰安の情を寄せんとするの旨なりけり。此邊の用意は、同權、低權などの問題内に入らしむべき處作にあらず、一にこれ、有情深愛の心掛たり。今の女學生たるもの、妄りに異國人の外形になづみ、俄かに習慣を變へて、人情を理屈の下に葬むることあるべからず。

○妻に威張るは英雄にあらず

然しながら、男子たらんものも、大ひに心すべきことあり。夫人に一任したる家内に歸り來り、僕婢の支配をまかせて其上に威嚴を有たざる可らざる内君の前に於て、殆んど有るか無きやに睥睨し、旦那は天頭さまの如く、一天万乘の主權ありとて、豪々然あぐらかき、美事にもあらぬヲトガヒを以て、ゑらそうに、夫人を頤使すること、極めて見にくし。辨慶は、家内にて威張らず、大勇の人は、女性にしとやかなり。五郎時致が、敵に生擒せられしは、女を勞わらんとての怪我ながら、以て大丈夫の心膽を示すに足る。心得ある優しき良人たらんものは、成るべく内君の手を煩わさゞることに心掛け、自から處辨し得べきほどの事は、成べく自から處辨するを好しとす。「コリヤ〳〵煙草盆」などゝ、一間さきに在るを取らんとて、次の間より召び寄せ、鳥が羽を落す如く、脱ぎ散らし落し散らして衣服を更え、足を突き出して靴を取らせ、卷煙草をくわへて灰が髯にかゝりたるを拂はするなど、必らずしも男らしからず、誰か之を以て英雄の所行となさんや。良人たるものも亦た大ひに誡しむべきことあるなり。

○太閤もちの妻

太閤もち(幇間)の女房となること尤とも難しと傳ふ。これ、家の外にて人に馬鹿にされ、不平を呑んで辛棒をかくし、在ん限りの根を氣げん取りに使ひたる后の御歸宅なるが故歟。

世上の良人たる人に、此類屬少なからず。外にて、言ふべきことを得言わず、主張すべきことを得主張せず、屈し、鬱し、もやくやとして家路に向へば、此時、口中にて先刻言ひ切らざりし答辨を罵言し、ハタと電信柱を睨みなどして、不平勃々唯一の君主獨裁國なる己が家にと歸着する也。其後の權幕推して知るべし。かゝる人の妻たるものこそ、不愍なれ。些細の事に叱られ、針の穴の欠典も一々説法せられ、如何に氣を着けても、尚ほ滿足せられず。或時は滿足せらるゝほどに仕ゆるが故に、言ひ分なしとの氣味に　反つてヂレられ、何事にも、イヂ／＼として小兒の虫の如き癇癪を起さるゝこそ氣の毒なれ。斯る人の妻は、寧ろ胆氣なく、伎倆なく、言はばヂッケン小說中の雛嫁の如き、無邪氣にして髯を引張るほどの乙女にてあらんことを要す。夫れ、良人は丈夫、妻は佳人。男女陰陽の關係を存せんと、極めて肝要なり。妻にして良人に優るほどの、胆氣、技倆あらんときは、男女顛倒し、夫妻所を異にして、和睦せんとかたし。よし和睦すとも、和樂あることなし。よし和樂ありとも、男女各自の美所を發達することなし。あゝ、伉儷撰擇の事、難ひ哉。

○花散りなばと

人の心も知らで、淺はかに推し測り、彼の人の今しも熱するは、云々の事ありてに由る、暫らくせば大方は心とけて忘れやすべしなど斷ずるこそ、情なきことなれ。一と度び許せし心の如何で輕々しく變ずることを得んや。わが思ひ、石にあらず、容易すく轉ばしがたし、わが胸、むしろにあらず、俄かに卷くべからず。請ふ乞ふ暫らく關わり玉ふことあるなかれ、われは、靜かに打案じて叙むろに心の落行くまゝとせん。と、悲しげに、さびし氣に、最とつゝしみて怨ずるを聞けば。花の人か、人の花か、西行が新古今の歌を誦するにでありける、

よし野山、やがて出でじと思ふ身を、
花ちりなばと、ひとやまつらむ。

○あだ波は淺き瀨に限らず

あだ波は、淺き瀨にかぎり、騷々しきは、うつろの響きとのみ定むべからず。沈みがちの人の沈み、鬱し易き人の鬱する

は、むしろ其が自然なりとす。此の人、にわかに浮かれ、例になき快活の面容して、さかむに戯言など吐き散らさん時こそ、肚下熱腸の沸えかえる機なりと知れ。こゝに於てか、われ、輕評のたのむまじく、俗說のあやまり易き所以を知る。忠奸、容易すく判ずべからず、虛實一朝にして辨まふべからず。人を讀まんとせば、其が心の奥をこそ洞察すべきなれ。表面外形の取沙汰は、雲をながめて、最と高き天心の靈能を妄斷するに左も似たり。

君なくば、なぞ身よそはん、くしげなる、
つげのをぐしも、とらんと思はず。

亂髮粗裝の乙女は、情けなき乎。衣に錦をかさねて、未だ春にあわざるあり。身に落葉をしめすと雖ども、豈に一片去りがたきの春思、丹心にひそまざらめや。われは、年わかくして裝ほひの色めだたず、天然の美貌、わざと磨かざる肉皮のうしろに潛む佳憐の人をあわれとす。

○雲路たづぬる人もあらす

あゝ彼の高等女學の人、文字を知りて憂患多く、才思ひらけて悶意やむときなし。高く一世の上に標出して、情ある男子、みな低くし。抑そも、何人にか信從せん。歲、一年に高く、世、ひとゝせに後れ、學いよ〳〵積んで、用ふべき機會いよ〳〵少なし。半生の學、得たる所ろ何ものぞ。遠く古人を友とし、僅かに理想をもて慰さめとす。暮天、外國文を朗らかに讀み、强ひて鬱思を遣らんとすれば、書中の春色、反りて現世をうらましむ、

くやしくぞ、天つをとめとなりにける、
雲路たづぬるひともなきよに。

高等女學生を、束縛し、檻禁 、之に精神上の死をうながすものは、そも〳〵孰の罪ぞ。

○形骸こそ枯木なれ

白雲深き處ろ老僧多く、熱愛寄するに人なく牧師出づ。誰か、落葉の草に向つて花なきをとがめ、寒鳥の一木に艶なきを笑わんとすらん。某法師うたひて云ふ、

かたちこそ深山がくれのくち木なれ、
こゝろは花になさばなりなん。

女學

女學校々舍の建築と女生の儉德

石翁

女學生節儉の氣風を養成すべきとを、或る宏壯なる女學校の女敎師某に詢りたるに。其人の答ふるやう、これ眞に肝要の事ながら、結構壯大にして、規模ひろく、諸道具の備え万端不自由なき

　便利至極の校内にて儉德を養はんとは

太はだ難し。チヂを轉ずれば、淸水混々として湧き出で、毫も井戸釣瓶に汗を出す苦勞もなく。浴湯少こしく濁れば、サッと落して新らしきに更ゆる西洋風呂の心地よさは、湯のあか浮草とたゞよふ下より熱湯の横槍を突き出さるゝ不安心の類ならず。朝夕の食事は、合圖の鐘聲もろとも器械仕掛の如く、ズット列らび、喫し了れば、塵を拂つて立つの躰即坐の離席些さかも掛念なし。而も、献立は、上等家族の惣菜にひとしく、一日一度、魚肉を見ざるとなし。

　建築宏大にして

風景絶佳。冬は芙蓉の雪を窓の下にながめ、夏は遠海の風を胸の上に迎へ、庭園ひろくして樹かげ面白く、芝生平らかにして席ろを敷きたらんが如し。春は、花を摘まんで之を挿すに盡きず。秋は虫聲を聞いて寢ながら夜とぎとなすべし。凡そ、かゝる、

　結構至極の家居に住しては

何如で、身の程を辨まへ、儉德を助長するとを得ん。況んや其敎師たり、管督者たる人を見るに、外國よりの給金莫大にやあらん、金錢の使ひ方、極めて鷹揚なるに、倘且つ外國人の買入れとて直段一ときわ高價なるを、ダズン(十二)何ほどと容赦なく支拂ひ、

　一食一度金一圓

月少くとも五十圓の食費を拂つて、其他の万事之に稱ひたる生計の現に普通當然の如く行わるるを目睹目擊するに於てをや。之を何如んぞ、儉德養成の實感化に効あらしむるとを得んやと。

われ、つら〳〵此歎きを聞いて、悟る所ろ多し。嘗ては、西

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

洋女子大學の建築巍々乎たる寫眞を見て、涙を拂ひ、あゝ我日本女生の爲めに、何日の日か此の便利を供ふるとを得んとかこち、近くは外國人の寄附にて成立するもの、又は官邊の不足なき支給にて維持する女學校の惣じて美々しく結構なるを見て、吾黨の女生の爲めに其不自由なるを痛みたれど、

今や必らずしも然らず

學校の建築は、敎授に差支へなく、衛生に不都合なくば、成るべく、當世の民度と平均し、其校が目あてとなす社會の住居と余り相違なき度合ひに結搆すべし。況んや、塾舍の建築に至りては、此の心得一層緊要なり。女生をして、塾舍の便利に慣れ、今の日本の複雜亂暴なるホームを全く忘却せしむるとなかれ。御殿に、姫をそだてゝ、之を裏店によめ入らすは、氣の毒ならずや。狐の穴、鳥の巢に比すべき定居さへ無からんものは、先づ馬槽の内にて生れたり。人は、なれ易く奢りは長じやすきものゆへ、塾舍平生の不便不自由は、反つて一生の自由便利を得せしむる基ひとならん。左れば、校舍の建築は、敎授と衛生との二つの要點を除く外は、成るべく質素に、成るべく時世に比準せしむべし。而して、余資あらば、之を、

敎授用の器械、又はライブラリー

に多く用ひ、學問研究の方には、あらん限りの便利を供ふべきとを氣付きたり。此の因みを以て注意すべきは、學校の飾りに表裏の外見をたがえぬとなり。入口の方はペンキ塗り、裏は驚ろくべき粗末なるこしらへなど往々にしてあり。かゝるときは、前后成べく平均して造るべし。學校は他人に見すべきものにあらず生徒に見せて感化すべきもの也、内外一致、万事成べく質實ならんと願はしきに、女學校にて儉德を養はんとするには、此の心得一段大切なるべし。

○紙上女子敎育研究會

廣ろく世上の同人に御相談仕度は、女學雜誌「女學」の欄内を借りて、女子敎育上の理論、方法、實驗などを交も相知り互ひに相諭りたき一事に候。女子敎育の學は、英米に於ても尙新らしきとに有之。本邦に於ては尙更の事ゆへ、只管ら廣問同究の手段願わしく、先以て世上に同志の諸君を求め候也敬白

明治女學校　某、白

逸事

○春畝伯、下田歌子に一言を送る

春畝伯は、手腕の人と云はんより、耳目の人と云ふべきか。たとひ其事業は屢ば初志と相ひ違ふありとも、聰慧にして一瞥する所ろ、能く新智識、眞底蘊をさぐらずと云ふとなし。伯や、夙とに洋行の利益を主張し、而して、洋行の利益は、ホームの内に宗敎道德の感化を蒙むるにあることを知り此の他に洋行の良結果を求めんは詮なしと言はるゝとぞ。下田歌子、御用掛の名を以て、一年間歐米巡回の途に上らんとし、行いて春畝伯に告別す。伯、之を送りて曰く、御身もし英米の實况を探らんとせば、其戸內宗敎道德上の感化に眼こを着け玉ふべし、もし好き家づとを齎らさんとせば、其感化をこそ攜さへ玉ふべけれ、其他に廣ろく求め玉ふとも、遂に一物のよきものあらじと。

○加藤とし子ちよいと亞米利加に行く

加藤勝彌氏の北堂加藤とし子女史は、覺悟ある女丈夫なり。早く良人に別れて遺子を養育し、遂に今日あらしむ。一たん、人生の悟りに警發して、越後の舊家をたゝみ、都に上りて、年五十新たに神學を研究し、又、女子獨立學校を起す。其の迂なりと見ゆるは、直なるによる。其遲なりと見ゆるは、守るあるによる。而して、往々調子に外れ拍子にぬけて、倘且つ眞摯滿面なるに至りては、心あるもの誰か感激せざらんや。去年、シカゴ大博覽會を見んとして、一英語を辯ぜざるに雜作なく出發せんとす。而して、人未だこれを知らず或る時、急に諸生に告別して、私はちよいと亞米利加に行つて參りますと言ふ。語調、お隣りに行くが如く、無雜作なること、明日直ちに歸るが如し、而して、此は其の飾りたるにあらず、其眞面目の所ろなりとす。

○德富ひさ子會頭を辭するの詞

德富蘇峯氏の母ひさ子は、重んずべき人なり。就いて學ぶべきと多かるべけれ、近日、婦人矯風會頭に撰ばれし時、辭して、左の如く言へり。眞實にしてチカシミある處ろ、宛然其言

動を目のあたりに見るが如し、
私の樣な、カスの樣な者を、皆樣のお撰びなさるは、余りです、こんな立派のお方のお出でなさるのに、皆樣のお目のないのを、おうらみ申します。私は、いつでも、辭するなどと申して面倒の起るのが嫌ひですから、大ていの事ならお受け致しますけれども、此度計りは、おことはり申します。

統計

○男子の女子より多く生るゝ理由

吳文聰

洋の東西を問はす男女の出生を比較するに女子百人に對し男子は常に百四五人なりとす其理由を尋ぬるに從來世人の說く所に據れは。第一、男子の職業は劇烈にして死亡從ふて少からさるを以て之を補はんか爲之とするものあり。第二、男子の身躰は其構造女子に比し一層精緻を極むるを以て其死亡を速くも亦一層容易なれは之を補はんか爲之との說あり。第三、男子の身躰は女子より肥大なるを以て生產時の困難あり從て死亡多きか爲め之を補はんか爲めなりとの說あり。然るに第一說は男子の死亡未た職業を執るに至らすして死する者多き點より觀れは其當を得す。第二說は造化の所爲にして男子女子其構造を異にする筈なく又生理學上の實驗に徵するも異同あるとなけれは取るに足らす。第三說は死躰分娩に於て既に男子多けれは是亦確乎たる不易の說と云ふへからす。蓋し此問題は諸學者の未た明答し能はさる所なりしか今余か考案に據れは、男子は幼少の時其數女子より多く、女子は生長の後男子より多きは是れ人間男女兩性の自然の形躰なりとす。世人は唯老幼の名稱に重きを置き此自然の理を悟らさるのみ。元來物の齊しからさるは自然の性質なり、例之は樹木の如きも末細くして本大なるは使用上より視は不利益なれとも此形躰を爲せるは畢竟風雨に堪へて直立するか爲なり。女子の生長後に其數多きは保姆の任を盡さんか爲なり。是れ人類の生存に必要缺く可からさる要件なり。而して女子の長生して高齡を保つは最早自己の職任を盡したる後にして此世に用なき者なり。是猶男子の幼時に於て無用のもの存するさ同一なり。然れは造化は男女兩性の幸福を同一ならしめ唯男子は幼者多く存し女子は老者を多く存したるに過きす。世人或は難して曰はん然らは男女同數に爲さは可ならん年齡も幾才と確定せは可ならんと。然し斯く一定不變にては少しも妙味なし。却て變化不測長短相補ふの間に天工の妙あるならん故に男女の多少は現在有りの儘即ち生れたては男多く死にきは女多きか人間生存の道ならん歟。(統計學雜誌九十二號より轉載す)

○小學校學齡修學不修學

一昨年の調査によるに、學齡百人中の修學割合は

尤とも多き所ろ　石川縣にて　七十八人、九六
次は、三重にて、　六十八人、六一
其次は、滋賀、高知、奈良、山口にて、　六十四五人。
次は、鹿兒島にて　卅九人、六三
尤とも少きは沖繩にて　十七人、二七
其次は、靑森、長崎、新潟など　四十一人乃至四人。

○幼稚園の有無

同年の調査によるに、各縣に於ける幼稚園の有無は、

私立無き所ろ　群馬、山梨、長野、宮城、京都、福井、富山、和歌山、島根、岡山、香川、高知、長崎、大分、熊本、鹿兒嶋なり。其他の縣には皆あり。
官公立無き所ろ　千葉、栃木、靑森、兵庫、三重、愛知、滋賀、鳥取なり。
其他の縣には皆あり。
右二表に名なき縣は、官公立、私立、ともにありと知るべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜錄

撰擧競爭前のクリーブランド　末摘花

通信者として有名なるイー、ゼー、エドワード氏は近頃一書をマックルーア新聞に寄せて大統領クリーブランドの品性を論じ、その僅々數年の歳月を以て赫々この如き勢力を得るに至りたる秘密を講究せんと勉め、且つ政治上クリーブランドと親密の關係ある人々の説を掲載したり、吾人此等の人々の云ふ所を見るに、クリーブランド大頭領の捷速なる成効よりも、寧ろ氏が特有せる技倆の非凡なる、氏をして政治社會の慣習に反し、政治家が只一の武器とする機關を蔑視せしめ側ら、而も天下輿望の中心たるに適せしめたるものあるに驚服したり。蓋しエドワード氏は共和黨中德操堅固の聞へある人にして、特に氏か本論を草するや、その材料をクリーブランドと親密なる政黨員に探りしは、吾人をして本論の信憑すべきものたるとを信ぜしむる所以なり。氏や曰く、思ふにクリーブランドのクリーブランドたる所以の資格は、只品性てふ一語の以て之をつくすあり、エマーソンの稱して蓄積力となすものは、氏に在つて、實に眞理の威嚴を證明せりと。

クリーブランドは政略家にあらず

エドワード氏は、クリーブランドが世の所謂る政略家にあらざる所以の證左を列擧したり、曰く、

政治家としてのクリーブランドは、政黨組織の必要を知らす、只その必要を解せざるのみならず、兼て之を組織するの方途に對して些少の智識だに有せざるなり。吾人若し撰擧競爭中に於ける氏が擧動に注目せば、その弱點の爰に在るを燎々火を見るが如かるべし。往年氏が二万票の大多數を以て撰はれてニューヨーク州の知事となるや、世人は氏が才の能く以て大統領候補者たるに堪ゆるとを認めたり。然りと雖も、協力以て氏がために盡さんとするの人々は、久しからずして一の必要と一の欠乏とを發見したり。必要とは何ぞ曰く、氏を候補者として指名せんがためには、爰に一政黨の組織なからざるべからざると。欠乏とは何ぞ曰く、候補者その人が此組織の必要を解せず、また將に之に冷淡ならんとするとにぞある。是を以て一千八百八十四年

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の撰擧競爭の節も、氏は少しも之に與かる所なく、また氏がためにその友人が盡したる事柄に就きても、全く之を雲煙の内に經過し、遂にその政友マンニング氏をして「世に技能能く之に堪へながら而も政畧の何たるに至りては無智兒子の如き人玆にあり」と歎息するの止むを得ざるに至らしめたり。

氏已に擧げられて大統領の地位に立つに至りたる後と雖も、氏が政事運動に對する無智なるが如き樣あるは、氏が爲めに協心助力せる政友をして、屢々驚愕措く能はざらしめたり。嘗てその政友某、クリーブランドの許に至り、ニューヨーク洲の現狀を語り、時の知事ヒル氏が將に一政黨を組織し以て氏に反對の運動を試みんとするを語り、尚具さに時に及んで之を妨げ、之を拒み、之を散し、同時に同洲に於て自己の爲めに信任すべき一政黨を組織し、以てその手足を延ばすべき方案を告げたり。蓋し此等の人々は、多年身を政海に委ね、經驗と修練とを積み、特にニュウヨークに於ては屢々勝利を攫したる老練の政事家なりき。而してクリーブランド氏が之に對する擧動如何。冷々としてその親友が氏の爲めに憂ふる危險を感ぜざるが如く、陋として彼等が建つる方策を解せざるが如く、遂に之に顧慮する所あらざりき。當時如何ばかりの憂悶と驚愕とは此等政友の胸を打ちしが。少しく政界の事狀に通じたらんものには之を推すと蓋し容易なるべし。

一千八百九十二年中、社界の大勢將に大に氏が指名に反對するの傾向を現はし、その成功も殆んど覺束なく、氏が政友は皆痛く心を苦めつゝありしとき、氏がニューヨーク委員會及び民黨の反對に對する冷淡なる言語を以て、その政友を驚かしたり。一夜氏がビクトリア、ホテルに在りしとき、數多の政友はその許に集ひ、憂悶類を集めて深く協議を凝しぬ。氏は傍に在て之を聞きながら、敢て何等の建議する所なく、又何等の助言だも加へず、冷々として知らざるが如し。若し他人をして之を見せしめば、誰か氏を以てその本尊と知るものあらんや。氏は漸く之に倦み、遂に暑氣の堪へ難きを述べて、他の二友と共に出でゝ散歩を試みたり。當時氏がその友に語りし言の如きは、實に氏が性格を見るに足るものありて存ず、曰く、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

諸君、余は諸君が余に告ぐる如き事柄のために少しも驚かされず。彼等反對黨が爲さんとする所に任せよ、假令ひ如何ばかりの反對あるとも、余は信ず、勝利の遂に余が手に落ちんとすることを。

幸にして氏が言遂に實と合ひ、氏は古來の先例に反し、强烈なる反對を破つて赫灼たる勝利を全ふしたり。然れども人心未だ穩かならず、ニューヨーク洲復仇の擧をなさんとするの警報倘繁きときに當り、その政友は百計氏に告ぐるに詭計を壓するの反對組織を以てす、氏は如何の答をなせしぞ、曰く、

否々諸君、彼等を放ちて、その心の儘に働かしめよ、余が撰擧せらるゝ何ぞ必ずしもニューヨークのみに力を借らんやと。

氏が政事運動に對する擧動大率ね此くの如くなると雖も、吾人は倘ほ氏を以て全く、

政事組織に冷淡なりしと信ずる能はず

尤も政畧家としては、氏が秀逸の士にあらざりしは爭ふべからざるの事實なり。然りと雖も吾人之を聞けり、氏は決して政事組織に冷淡ならず、却てその必要を信じ、且つ之を助けたるの跡あることを。エドワード君、記して曰く、

氏が全く政治組織に冷淡ならざることは、ニューヨーク州の民黨諸士と氏がビクトリア、ホテルに於てなしたる會合に於て現れぬ。當時起りし事狀如何。言語擧動如何は吾人或は將に他日詳細之を見ることあり、又其性質、特に政事上に於けるその技倆を知るの由あらん。今唯だその已に知る所を以てすれば、氏は熱心に、協力同心が政事家に必要にして且つその權利と義務たることを主張したりと。然れども倘ほ氏が特有の本性はその端を現はしぬ。當時同席中の一人脅迫以て氏をして或事を爲さしめんとする所あるや、氏は之を肯ぜずして寧ろ断然袖を拂ふて去らんことを告白したりと。爾來今日に至るまで此等の人々も皆大に氏の公議に服し、遂に氏が掌中のものたるに至りたり。

今や、我國の總撰擧、目前に迫まる。如此き公平と、如此き度量とを以て、よく撰擧場裏に立つ人ありや。夫れ、修養は一日にあらず、信用は十年の蓄積なり。平常着々養ひ且つ積まずんば、何如にして能く如此くなることを得ん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

理學

遊星の空話

其二

けい子

次に現はれしは、歩行甚だゆるく、悠然たる好男子、頭に金色の帽子を戴けるは、此人々の皆々羨やむ、所なるべし、「是は大層おすましで」ト皆々に冷かされて、笑止さうに頭を掻けど、更に帽子に碍らぬさまは、大方帽子は瓦斯製なるべし。此星一躰優美にして、支那人などには、詩にも歌はるれど、實はお心善と見えて、そろ〳〵子自慢を始めたり、成程其傍らに八人の衛星を引連るゝを見る、地球も負じとや思ひけむ。我にも常娥といふ娘あり、容貌はいふも愚か、心操も亦素直にして、夜々清く淡く冷やかなる光を放ち、我體を照らす、人は之を打ちも置かず、愛で賞して月雪花と三ツに數ふ、殊に一月の中に圓くなり、半圓となり、弦となり、時には又形を收めて其趣きを替へ、始終人に厭かれぬ身嗜みなど、洩れなく語る、常娥は流石に我身の上の恥かしくやありけん、恨み顔に、「親父樣さう言つたものでもございません、私は一躰無器用で、一人で轉ぶ事が出來ませんから、晝と夜とが半月宛、其故片側の暑さは、片側の寒さと、ホントに辛うございます、而して水も持たねば、空氣もなく、皆樣のお前には誠にお恥かしうございますト悲し氣に語る時、「お孃樣さうおつしやつたものぢやァございません」ト、進み出しは火星ゆゑ、常娥は女氣の才、怖やとて、打戰くも道理、昔より此星は、熒惑とて忌み嫌はれ、此星出れば戰爭又は、天災ありと言傳へり、現に近きためしは、十年の役にも此星出でしより、西郷星とも言はるゝとぞ、地「何時もながらの赤いお顔で入つしやる、貴公は全躰支那人には、大層嫌はれてお出だけれども、西洋人には其れは〳〵大變に好かれてお出でございますョ、一躰お隣づからで一番お近いのでございますから、中好く致さねばならぬのに、支那人が元來不心得でござります、流石文明の西洋人は天文學の上で、觀測をするに、一番樂しみのある星だと言つて、望遠鏡で仔細に見て、貴公の方には陸もあり、海もあり、又時々雲のやうなもの、起る

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を見れば、水蒸氣あるに違ひはない、水蒸氣がある以上は、水もあり、雰圍氣もあるに違ひないといたして居ります、して見ると必ず人間が住んで、其人間は私の方でいふ神のやうなゑらいものではあるまいかと申して居りますヨ。火「左樣でございますか、其れを委しくお話しては、何だか人樣へ内證を明すやうでよくございませんから、兎に角其西洋人とやらでも、お遊びがてら、私の方へお遣しなすつてごらんなさいまし、地「其りやァ參りたいは山々ながら、迚も私の方の人間ぢやァ、駄目でございます、未だ其程の智惠はございませんもの、悲しいとでございます。折しも火光長く引きて物も言はず通り過ぐる、勘當息子の彗星といふに驚かされて皆々始めて我に歸り、「ツイお話しに實が入つて、大事な旅を忘れて居ました、御互に夜の長い所や晝の長い所などが出來ては、大變でございますからドレそろ〳〵と轉げ初めるとしませう「左樣々々、御互の身躰を皆な合せても、ヤット大陽の七百分の一、動くまいとしても、迚もかなへる事ぢやァございませんから、さあ是から參りませう」ト、皆々轉げ出でけるが、此時早先きの水星は影も見えず、金星のさつ〳〵と行過ぐるに引換へて、火木天王海王星等の歩みの遲さ、地球は出來るとなら、話しながらと、水金二星に向つて、「お待ちなされ〳〵、オーイ〳〵」、火星其他を振向きてハ「早く入つしやいヨ、後れますヨト」頻りに氣をあせり聲を掛くるも聞ばこそ、程なく皆々行方知れず、物別れとはなりにける。

書架

淨瑠璃史を讀む

秀野生

寺山星川君の淨瑠璃史出づ。こは先に城南評論の紙上に於て讀者をして、大に其精細なるを嘆美せしめたるもの、今や淸楚なる一卷をなして余が机頭に上る。余豈に双手をあげて歡迎するの思なきを得むや。余は茲に其筆法叙記の如何を評論するの暇なし、只つゝまやかに其要領を抄記して、この好著を世の人々に紹介せむと欲す。これこの著が明治廿七年新文界劈頭に現れて枯凋の空林に一叢の彩花を添ふるが如きものあればなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

淨瑠璃樂産れて茲に三百年、汐くむ海士も三絃の音色を聞きては魂ゆら〳〵として美妙なるまぼろしの境に遊び、柴刈る山賤も先代萩、阿波の鳴戸の一とくさり語るをきゝては義理の柵、情のもつれに胸逼りて、鎌なげうち涙に襟を濡らしやすらむ。よし心無の儒士、情に淺き武夫などいかつがましく爪彈きしたればとて、上は貴人の花の宴、下は夕顔棚の下かげまで、この樂は普く行き渡り、さま〴〵なる階級を通じて愛でられたりき。これ三絃の音色、變化百端、時に明月の夜朗々たる笛聲を聞くが如く、時に滔々澎湃怒濤山をくづすが如きものありて、以つて、所謂一穗燈の如く、萬束炬の如き人の運命を活現描寫したる優妙非類の詞曲を奏するが故のみ。それ頑迷の輩は何時の世にかは絶無ならむ。淫靡の巷に弄せらるゝと多ければ、則ち三味線をもつて卑しむべきの淫器となし、坊間賤劣のやからに流行すれば、則ち淨瑠璃をもつて、士君子の聞くに堪えざるものとなす。余は三絃淨瑠璃などがこの感情の爲めに少からざる抑壓を蒙りたるものありたるを思ふて、憮然たるものあり。明治の今日なほ斯の如きの輩あらば余は何の辭を以つて、これを評せむ。

今や星川君新眼孔、新史筆を以つて、二年有餘の日月を費し、經營苦辛、斷紙零墨苟しくもこの樂に關するあれば一々捜索探究し、備さにこの樂の淵源推移の跡を討ね、整然たる一篇の史册をなす。讀者をして、燦然この樂を腦底に活現せしむ。君が勞や多とすべし、君がこの樂に懇なる謝せざるべからず。

史は先づ淨瑠璃創始時代に筆を起し、斯の樂の因を説き、平家琵琶、説經、謠曲、祭文をもつて最も近き素をなしたるものとなし、つぶさに淵源起首を描き、遂に類を分つて東西の兩派となす而して東西の面目相違の生ずる所以は社會的意欲に歸するの外なしと論ず、德川治世の初年、血痕未だ乾かず、瘢瘡なほ癒やらぬ旗下の士が、大平事無きに苦しみ、竊に過去を追懷し、何にかにつけて、其勇をもらし、其鬱を遣らむとする社會的意欲風習に化せられて、茲に簡健清遒の東派を形造る。この樂ひとたび京都に移るや、いちはやく柔にして優、陵嶒たる氣骨に乏しき民風に化せられて、柔麗華縟のさまを顯はすと論ず。

寛永の始めより享保の末に至るまでを東派の前期となし、薩

摩浄雲出で、虎屋源太夫出で、櫻井丹波出で、遂にその逕健なるもの跌狂となり、その清鮮なるもの勇猛を極め、百家時代となり、河東時代となり、沈痛激越の調うすらぎて、清冷淡雅の趣をなし、遂に淫靡卑猥なる宮古路豐後來て東派衰ふ。京都はこの樂を三絃に合して、謳ひ初めきといへる瀧野澤角等住みたれば、この地もてこの樂の創始のところといふも不可なからむ。源太夫こゝに來り、宇治加賀を出す、この人、精勵刻苦東派の窠舊を脱し、濃艶華麗の妙を極め、次て都一中等ありき。浪華にてこの樂の特相を具したるは、井上播摩あり、その後竹本筑後あり。豐竹越前あり、東の浄雲、京の加賀、浪華の播摩はこの樂の三祖たり。筑後は世に所謂義太夫節を起したるの名家、近松の精妙なる詞曲と相俟つて、舌端花を咲かしむるの妙ありきと。

これ浄瑠璃史敍法の大畧なり。もしそれ其筆法清鮮巧緻、よく平易明快を欠くの憾なきにあらねど、錯綜せる幾條の線を辿り、その因果を捉へ、その理路を描寫するや、眼孔奇警、筆勢汪蕩、この樂のために千丈の光焔を吐くものならむ。

君は浄瑠璃樂を以つて、單樂なりといはむよりも、複樂なるものならむといふ。いはく。

複樂は包有濶大なる宇宙、及びその各個躰の動靜、靈活神妙なる群生及びその運命の榮枯、凡そ把るところとして樂家腕裏の材たらざるなし。故にその境涯は割合に廣濶にして雜駁なり。單樂の妙は一彈指間の情を聽者に與ふるにすぎず、複樂は則ち人生を骨髓として宇宙の衆妙を配接するが故に、聽くものいづれも泣き、笑ひ、喜び、やがてかれが爲めにといふことをも忘れむとす。單樂の妙は或は複樂の兼有する所となれど、單樂は然るを得ざるなり

これ君がこの樂をもつて、他にたぐひなき衆妙を兼具したる者となすの論據なり、思ふにこの樂は、その躰裁純乎として純なるものにあらずして、或は傀儡と伴ひ、演劇と合し、樂師がこれを語るときのありさまなど、いづれ芝居がゝりの表情法によらぬはなし。これ君がこの樂の特相としたるところにして、また一面には純ならぬ樂として時に異様の待遇を受けしところならむ。よしこの樂は純ならぬにもせよ衆妙を具して、人情の秘奧を徹し、因果の理法を描く、高低緩急の音自在なる三絃を相合する時、聞くものたれかわが普通樂としてこれを愛で、愈開展發達せしむるの情なからむや。

この普通性の由來を知るに足らむか。然れども今日の浄瑠璃樂界何ぞそれ懷古の情に切にして、一躍開展發揚の氣運を激

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

勵せざるや。若し東西兩派の特相均しく當時社會の意欲によりて相違したりとせば明治のこの樂が舊に傾き、新をきらふはわが社會の意欲これをして然らしむるものなるか。わが國物質的文明に熱狂して文藝演技の趣味壞裂せらるゝや久し。一部の青年文士たま〳〵其の詞藻をもらすも彼等が歐西の趣味を採つて、わが文藝を肥やさむとする時、無學なる舊時代の技人藝手はこれに追及する能はず、空しく後邊に瞠若として呆然たるのみ。而も冷澹なる公衆は、これらの技手藝人の身邊に集まりて、傾聽嘆美す。この時に於て文士と技人との間千里をへだつ。この不調和は劇に於て、詩に於て、樂に於て、屢これを見る。復古と改進とは何れの社會にも有り勝ちのとなれど激烈なる革新の後には、この爭鬪最も甚し、我國の現狀實に然り。

この不調和を打破せずむば完美の域に至りがたし。若しこの樂を以つて聽くに堪えざるものとせば則ち已む。苟しくも發暢開展せしめて益其特相を表顯せむと欲せば、この樂またこゝに一機轉せざるべからず。その詞曲また新文士の手を勞せざるべからず。

君もまた余と感を同うするもの、嘗てこの樂の發達につきて、考案を立てゝいはく、敎習所をもうくること、坊間の恣なる敎習を廢すること、改良的の公演を盛むにすること、と。その意寔によし、さらば君が新作曲につきての意は如何。君史に於て筑後を論ずるのくだりにいはく。

世話物のかたきは特に樂場に上りて著きものあり。詩境の化して樂人の口の端にのぼるときは一齣の間にも樂相即ち小天地想を顯はしたる境涯ありて、聽者を悅ばしむるの妙なかるべからず。これ戲曲と他の詩との別るゝ所以なれど、時代物と世話物との間に於ては、現社會を主とする世話物にありて、特にこの變化を表はすの難きをみるべし。或は材のうへに古今の別みだれて、興味の索如たる場合も割合に世話物に多きが如し。わが嘗て新作ものかたるを聞きしとき今の罪定めする庭のさまをば、古曲にいはゆる阿古屋琴責の段とひとしなみにかたりて、辯護人は畠山の如く、檢事は岩永に似たる所あるを笑ひたりき。われは常時恣にこの衝突を名けて比較の索如といひぬ。語意を盡さざれど新古の對比より起る旨味の壞滅を指したるなり。

それ今日この樂の詞曲を作らむとせば、時代世話いづれを問はざるなり。たゞこの樂をして一段の進渉をなさしむるものあらば足りなむ。君が世話物作くるのかたきを以て現社會との比較によりて、趣味の索如あるをいはれたるはわが心を得たれどもこば恐くはこの樂の因襲するところに染まりて、懷

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

古の氣胸に結ぼれ、新相を拒絶せむとするものあるにあらざるか。時代世話のいづれを問はずこの樂詞のひとしく舊時代のもの、その世話物といへるきわも、多くは西方の言葉を用ゐ、これを聞く久しく、これに化せらるゝと多く遂に一歩をこの境外に出せば、怪訝の念直に動き來るものあるにあらざるか。詩文界に於て、劇界に於て爭あるはこれがためなり、否、何れの世にかは保守進歩の二主義相鬪爭せざらむ。

畠山に似たる辯護人が威儀を正し、岩永に似たる撿事が惡くさげににじり出で、阿古屋に似たる妓女が微笑むなどいづれか聽くものをして興味索然たらしめざらむや。されどこは覺束なき舊詩想、はかなき舊詞曲をもつて一意摸倣にこれつとめ、新を趁ひ、奇を弄してこの新世話を結構するが故のみ。無理の要求かは知らねどこの樂をして開展發暢せしめむとせばこれに鑑み、かれに究め、新古を掌上に輾轉して、更にその胃腹を潤大ならしめ、其特相を助長せしめ、其紗巧を發揚せしめざるべからず。君が意以て如何となす。

病餘考思する能はず、匆卒筆を採つて敢へて一二の妄語を呈す、多罪、多罪。

史傳

ペスタロヂと女性

鷗村

（其一）

山高く水清き、宛然歐洲の樂園たる瑞西國は、第十八世の上半期に於て、二人の革命的預言者を生みたり。其一人はゼ子バに生れたる、不平の生みたる不平の驕兒、ジーン、ジヤツク、ルウサウなり。彼は總ての革命的運動の預言者となり、ボルテイアと共に、佛國大革命の氣焔を迸裂せしめたり。他の一人は、即ちリユーリツヒに生まれたる、人情の生みたる人情の寵兒、ヘンリー、ペスタロヂーにして、大にルウサウに激せられて、遂に敎育界改革を唱導するの預言者となりぬ。ルウサウは矛盾の人なりき。極言せば、たゞ大聲叱聲して不平を洩すの外は、彼の裡に在るもの尠なかりき。彼は實に聲の人なりしなり、エミールは彼の理想なりしも、彼は絶叫して小兒の愛せざるべからざるを說き、當年の貴女をして、悚

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

然其嬰兒を抱きて接吻せしめたるも、己が一子は棄兒院に嚎哭したり。然るに、ペスタロヂーに至りては、其聲大ならざりしに非ざれども、其偉大なる處は彼が活生涯なり。彼は行爲の人なりき。孤兒の父となり、無告の徒が眞友となり、窮民をして人間らしく生活せしめんが爲に、自から窮民の生涯に甘んじ、遂に人のすてゝかへりみざりし孤兒窮民と共に社會進歩の潮流を一轉せしめたり。かくルウサウ、ペスタロヂー二預言者は、其志ざす所は素より一なりしが、其事業行爲に大軒輊ある所以は、蓋し大に理由の有つて存せり。其理由は他なし、ペスタロヂーには樂しきホームあり、貞妻賢母眞婢ありき。然るにルウザウは不幸にして樂しきホームに入りて、温和なる女性の愛情の洗禮を受くること能はざりしなり。

ペスタロヂーが家庭は、殆んど今日の開發的教育又人情的教育を生みたる源泉にしあれば、玆に大に學ぶべき處なり、其家庭の狀態を見れば、爰よりして大預言者を出さゞらんと欲するも能はざりしを知らん。

ペスタロヂーは一世紀の昔に於て揚言していへらく『今より半世紀の間に全社會の立場は震動せん』と。實に空言ならざりき、實に彼が赤手は、社會を震動せしめたり。第十九世の文明を唱導したるの功業を謳歌せんとするもの、ナポレオンに趨かんよりも、寧ろ當年イベルツンの小校舍に於て、少年咿唔の間に營々艱難を舐めたる貧しき老教師の痩腕にゆきて感謝すべきなり。

世の人類の存在する限は、彼が事業の功德は、決して忘らるべからざるなり、否、天地の頽廢する時來るとも、彼が事業恐らくは亡びじ。而して又彼と共に亡びず、忘るべからざるものを、彼が後に隱れて常に彼が支柱となりたる四人の無名英雄(婦人)なりしことなり。

四人の女性とは誰ぞ。即ち、彼が母スザンナ、彼が妻アンナ、並にバベリ及エリサベスといへる二人の下婢なり。

ヘンリー、ペスタロヂー、生れて僅に五歲の齢を重ねしとき、父ヂヨン、バプチスト、ペスタロヂーは、三人の小兒を其妻スザンナに托して死したりしが、天性淑德あり、貞操にて驚嘆すべき婦人スザンナは、これより亡夫の遺兒を教育せんが爲め、一身を犠牲とし、ツユーリツヒの當時文物旺盛の地なりしを以て、他鄕にありし其兄博士ホッツの許に賴らんには

平和幸福なる生活を營むことを得べかりしも、特更ら之を避け、纖手を以て貧苦の裡に三兒を教育したり。後、ペスタロッチー、當時の事を記したる中にいへることあり、

予は母の小兒として、母てふものゝ中にも尤も良き母の膝下に生長したり。歳序重りて過ぎしも、予は爐邊を去らざりき。かくの如き狀態なりし故に、予は男子らしき氣力、男子らしき經驗、男子らしく考ふるの法、男子らしき行爲などを發達生育せしむべき手段刺戟を欠たるとは、恰も予が特異軟弱なる性質の此等を要したると好比例を爲たり。

ペスタロッチーは、嚴父の兒に非ずして母の中にても愛情尤も深き母の腕によりて生長したるなれば、男子らしき處に欠けたるは勢ひやむべからざりしなり。彼が後年の朋友たり助手たりしニーデレアも、彼につきて『ペスタロッチーには男子たる處と等しく女子たる處ありたり』といひき。彼に孱弱なる處あらしめたるは、爰に在り。然れども後年の事業をなさしめたるも、亦爰に在り。溫く樂しきホームに生長したる彼にして、一度門外に出でゝ、當時瑞西國社會の黯憺たる狀態に觸るゝや、其胸間に横れる同情の絃々鳴動して、之を痛嘆憐憫するの念は鬱勃として禁ずる能はず。弱冠にして既に窮民を塗炭の苦より拯はんとするの志ありき。彼か僻村の牧師たらんとせしも、法律家たらんとせしも、教育者となりしも、一にこれ自己の如き母とホームとを万人にも與へんとしたるに外ならず。母てふものは、生涯彼の志想と結托して離れず、彼が理想の教育家は母なりき。人民の教育を以て全く母の手に委任せんとするは、彼が主眼とせる思想なりしなり。母は小兒が諸德の種子を蒔くものとして、大に之に重きを置きたり。彼が一生の教育進路の標準は、男子に非ずして其小說レオナルド及ゼルワルードに於て描きたる七人の小兒の母ゼルワルードなりしなり。

片々

○蠶繭防腐法の發明

節溫燈爐、二厘竈

蠶繭防腐法の研究に十有幾年の力を費したる結果遂に一大發明を成就して特許を得るに至りたる伊東忠三氏の事に就ては曾て屢々本紙に傳へたるが氏は更

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に幾多の發明をなして以て蠶業に益せんさし客臘に至り更に特許を得たるもの數件あり次を逐ふて左に記すべし

節溫燈爐　養蠶は天候に依り出來不出來あるものなれば之を救はんため從來溫煖育の法あり蠶室を密閉して中に火爐を置き炭火を用ゐ室內の空氣を煖め以て天候の不順を補ひ來りたるも此法によれば炭火の爲溫度を生ずる常に均一なる能はずして而も室內炭酸の量を增し若し之を避んさして空氣の交換を急にすれば從て室內の溫度を激變し蠶兒の發育に害を與ふるもの亦尠からず彼の蠶繭防腐繰解容易法の發明者たる伊東忠三氏（府下下谷區根岸町八番地に住す）は多年之を憂へて其害を去るの方法を考へ二十一年に一の輕便器械を得て二十三年より之を蠶室に實驗し之を從來の溫育法さ併行して同一種の蠶兒に試たるに昨年に至るまで四年間の成績何れも良好にして從來の法に比するに屑繭少く且つ收穫の石數も五分以上の增額を見たり是れ一分間二十四立方尺の空氣を煖め同時に新陳代謝せしめ炭酸を蓄積するの患を絕ちたるが爲にして現に石灰水を盛りたる皿を新舊兩法を施したる室中に置くに舊法の分は數時間ならずして溷濁を生じ顯然たる炭酸石灰の反應を呈し新法の分は一晝夜を經るも其兆候を見るとなきを得たり伊東氏之に名くるに**節溫燈爐**（一名爐燈兼用器）の名を以てし一昨年特許を出願し農商務省は精密なる試驗を加へて遂に客臘に至り特許を與へたり此燈爐は至て輕便なるものにて大さは纔に一尺立方に過ぎず十五疊數位の蠶室に一箇を備ふる時は終始室內の溫度を均一に保たしめ得べし而も其十二時間の點火費僅に三錢を要するのみ又之を座繰製絲の湯沸しに用ゐる時は亦終始平均の溫度を保ち煮過ぎ煮不足の患なく絲質も一樣なるを得るの利益ありさいふ

二厘竈　氏は節溫燈爐さ同一の仕掛を以て石油を用ゐて發したる火色を機械の裝置に依り白光に變ぜしめ糊を吹出さしめずして飯を炊上ぐる一種の便利竈を工夫し是も亦昨臘を以て特許を得たり之を用ゐる時は二十分時にして一升の飯を炊き一斗の湯を銅壺に湧かしむるに石油二勺即ち僨二厘にて足るを以て名けて二厘竈さ呼べり伊東氏は又前に特許を得たる防腐法の輕便法さして「防腐法」（蠶繭）さ題する方法の特許を客臘に於て得たり（一月十一日、東京日々新聞）

時報

◎敎育

●**文部省の訓令**　就學獎勵に關する訓令は去る十二日文部大臣より發せらる即ち左の如し

一　小學校の校舍狹隘なるが爲に學齡兒童就學の便を缺くも市町村に於て更に設備を爲すの負擔に堪へざる場合に於ては明治二十四年文部省令第十二號第九條の旨趣を適用し全校又は某級の兒童を二部に區分して敎授するの方法に依らしむるの注意を怠らざるべし

二　貧窮又は其の他の事情の爲に小學校令の規定に依り就學の免除を得たる兒童にして夜間日曜日又は便宜の日時に於て近易なる方法に依り相當の敎育を受けたる者には其の望に依り尋常小學校に於て試驗の上其の課程に照し相當の證明書又は卒業證書を與へしむるの方法を設くるは道廳府縣の便宜たるべし

次に又生徒恭順學生取締に關する訓令を發せられたり

一　師を尊び長を敬ふは德育の一大要義にして此の點に於て闕くことあれば驕傲不順の習を養ひ學校の目的に背く者なり校長及び敎員たる者は此の意を體して生徒を薰陶することに注意すべし

二　生徒は三名以上合同して意見を申立て又は校長敎員に對し强て面陳若は答辯を求むることを得ざるべし

三　生徒にして黨を結び敎員又は校長に對し抵抗又は强迫の擧動を爲し或は課業を妨害し又は合同闕課し敎員又は校長の戒飭に順はざる者あるときは各學校は其の情重き者を一週間以上一學年間以內の停學又は放校に處すべし放校に處せられたる者は文部大臣に由り情狀を酌量して特免を予ふるの外復校を許さず

四　明治十六年十一月二日附退學の生徒に關する達は之を廢止す

此訓令に對しては、世上多少の非難あり。「新朝野」曰く、「余輩は文部省が每時此種苛細なる法令を頻發して、而して德育發揚の大主義大方針に至りては茫さして

問ふ所なきを怪まざるを得ず生徒の亂暴の如きは抑々末のみ苟くも大躰の上よりこれが方法を講ず何ぞ生徒の亂暴に對して文部大臣の署名せる堂々たる訓令を發するを須ひんや余輩は此種の訓令に賛成の意を表する能はざるものなり」と「郵便報知」は曰く「文相が生徒の跳梁を制せんはよし只た制裁は何となく政黨員でも待するが如き傾むきあり且つ毫も教師の言動を戒めざるは惜むべきことにして吾人は此訓令が充分に其効を奏する能はざらんを恐る」と而して吾黨は斯かる訓令の發布せらるゝに至りし所以を察して痛嘆に堪へざるものあり

●興仁協會　沖繩縣那覇有志家の創設に係る同會は專ら地方の德義を養成する目的の由に聞き居たるが本年より會中に女子の德行を奬勵し質撲儉素の風を普及せしめんとて隔月一回之を開き道德家政上の講話をなすことに决せしにより奈良原增子前田光子中井竹子等の女子は率先入會せりと

●女學校設立　靑森縣南津輕郡花巻千葉稻城氏は實用教育の殊に女子に必用なるを感し之れが設立に苦心せしが先頃愈々女子得業學校なるものを設け專ら女子の職業と普通の智德とを啓養するを期ると云ふ（以上二件大日本教育新聞）

●實習女學校　佐賀市の同校は先きに婦人矯會といへりしが今は一の學校となりしのみならず學科の如きも改め補ひ先頃鍋島侯爵令夫人より一百圓の寄附あり其他少なからぬ金員を寄贈せらるゝものありて益々盛大に赴く由

◎美　談

●孝女賞金を受く　兵庫縣播摩國多可郡黑田庄村の內石原村村上金作の母とめは資性温順多年舅姑に事へ孝養怠らず殊に舅姑及び夫の病中日夜看病に力を竭し傍ら家事に精勵し能く幼兒を撫育したる段奇特なりとて此ほど周布兵庫縣知事より賞金として金一圓五十錢を下賜されたり（十二日、都新聞）

●一對の孝女　福井市老松中町の飴商北島淸太郎の母ふゆ女（四十一）は老母きく（七十八）に事かへて至孝なり人之を賞讃すれは只其行屆かざるを羞つと答ふ又同市元米澤町仕立職吉野たか女（十八）は祖父友吉（七十三）祖母むめ（六十九）母はつ女（四十一）に使へて孝養怠らず殊に母はつは盲目にて按摩を業とするを勵り朝夕に心を配りて事ふといふ二女多幸なれ（大日本教育新聞）

◎風　紀

●不潔費消高　去る十日の「平安新報」に祇園新地甲乙部遊廓に於ける昨廿六年中の遊客數と費消高を掲載せり總計を見るに遊客は廿六万三千八百七十八人にして其費消高は實に三十七万三千五百十二圓十九錢なりしといふ之れ唯一小部分なる祇園新地の計算のみ、若し全國の計算をせば實に巨大の金額が此不潔地に消費せらるゝなり

●常廓は移るに如かず　營業中止以來十數日寂寞として聲なき仙臺常磐町は流石の廢娼論者迄あはれ惻隱の情を催す程の不景氣なるが先に各樓主及有志家よりも移轉延期及非移轉等請願し置きたれど宇都宮其他の例によるも到底聞屆けられざるべく此上は一日も早く移轉する方得策ならんと某官人は物語りぬ（東北新聞）

◎片　々

●婚姻の奇習　藝州安藝郡倉橋島十二ヶ浦の內大字室尾浦に於ては頗る奇々妙々なる習慣ありそは同浦の女子にして若しも他村の男子と馴染みしときは其處の若者等は娘を懲すため樽入と唱へ酒肴を贈り娘は之れを受けて樽開きと稱して氏神社內に於て太皷を鳴らして其披露をなす此時浦中の人は老若男女を問はず社內に群集し右の酒肴を飮み食ひし其の費用は馴染男の負擔に歸し其の娘は馴染男の妻となり著し樽開きを爲さゞるときは其の娘は終身人の妻となるの資格を失ひ亦之れを嫁に貰ひ受くるものなしとさて同所室尾浦小字池の庄大工鶴崎龜之助の長女にけい（十八）てふいふ姿容よき娘ありけるがけいは何時か近村倉橋島の農家の長男春次郎と怪しき間柄となり度々合引するを所の若衆連之れを聞き面白きことこそ出來したれと去る七日に例の樽入れを爲したるよりけいは先例に從ひ字惠美子堂に於て花々敷く樽開きをなしければ同所の酒飮連無慮二百有餘名は不景氣の折柄なれば十分腹の皮を伸ばさんと前後も忘るゝばかりに飮み食し近來稀なる賑ひにてありしと而してけいは其翌日滯りなく春次郎の妻となりしといふキャピテンクックにでも見せたらば隨分よき材料となるべし（十六日、讀賣新聞）

●上伊那參晉矯風會　長野縣上伊那郡東箕輪村に設置したる同會は近時風紀腐亂道德地を拂ひ益々逆境に陷るを匡正せん爲めの目的にて設立せしものにして會員責任として飮酒を禁し其他卑褻の言行を愼む等にして目下會員五拾有餘名其力微なりと雖も皆熱心に此事業に盡力し居る由同會員の報知あり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

俳諧史傳

近刊

●小此木、布川兩氏の著『俳諧史傳』正さに出むとす。嘗て『城南評論』『評論』の紙上、多少の讀者をして其精細なる筆法に傾倒せしめたる兩三篇は、實に斯の書中の一部のみ。

●思ふに、俳諧は我文學史上に、一大特殊の光明を煥發し、三百年の間、庶民の美妙なる想念を蕩漾せしめ、豪宕なる漢詩、優婉なる和歌以外、別に、幽玄、閑寂、悲壯、沈痛なる詩天地に逍遙せり。

●俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる壇林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、正風俳諧となり、平民的叙情短歌の面目を構成す。

●其源流に遡り、其發達を討ね、其推移を敍し、其變遷を記し、其特相を論じ、一讀の下、燦然として讀者の腦裡に斯の文學を活現せしむるものは、我『俳諧史傳』なり。

●これを分てば俳人個々の傳記となり、これを聯ぬれば、一篇整然たる文學史をなす。逸事ありて、以て興趣を横溢せしめ、名句ありて、以て一誦、天地の幽遠なる秘奥に冥合せしむるに足らむ。

●若しそれ、一字苟もせず、一筆輕々に下さず、言々證あり、句々據るところあり、而も文章、平易簡明、敍記、精到凱切なるや否やは、世の公論に一任せむのみ。世の俳諧を知らむとするの士、一本を座右に備へば、得るところ豈に鮮少ならむや。

●今や我社は斯の『俳諧史傳』の印刷に着手せり。讀者の机邊に現るゝは旬日の中にあらむ。敢て豫め公告すると爾かり。

發行所 東京神田表神保町六番地 女學雜誌社書店

文部省普通學務局學校衛生事項取調囑託醫學士三島通良先生著

學校衛生學

全壹冊 洋裝脊皮金文字入美本
正價金六拾錢
郵稅金八錢

三島醫學士か我國に於ける學校衛生學に就て、如何なる學術と功績とを有せらるゝかは、江湖既に定論あり。本書は實に學士か公命を以て四方を巡回し、今日の學校と生徒とを調査したる刻苦丹精に出て、猶ほ前任文部大臣一伯一子の勸誘に成る。其議論の斬新正確にして我國學校の實際に適合すへき事は論を俟たす、醫師、敎育官吏、敎師及ひ校舍建築工師は、必す一讀すへき實典なり

文部省普通學務局學校衛生事項取調囑託醫學士三島通良先生著

救世 種痘學

全一冊洋裝
新版種痘手術圖解入

正價金二十五錢 郵稅二錢

種痘の世に鴻益あるは何人も知るところなれども、其何れか眞正の種痘法なるやに至りては之を識る者稀なり。是蓋し年々天然痘の流行する所以なり。本書は最新の學理と數年の實驗とにより、先生の著述せられしものにして、議論嶄新、例證正確、種痘學に於ける近年の良書なり。醫師は勿論衛生に關係ある吏員及ひ學校敎師は必す一讀すへきものなり。

賣捌所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下
明宮殿下 御覽濟の書

巖本善治妻譯

再版

(リツトル。ロード。フホントルロイ)

小公子

子供のよみ本

(早稻田文學第四號)
坪內雄藏君批評

原書の精神は無邪氣なる小公子を主人に利己にのみ傾ける老貴族を副主公にして「無邪氣」の周圍に及ぼせる感化並に周圍の「無邪氣」に及ぼせる影響を寫さんと力めたるもの丶如し小說としての價値如何は譯書に就きて論ずべきにあらず只一言すべきは斯く純潔無垢の良小說を紹介したるは女學雜誌社平素の主義よりいふも誠に能く撰みたりと云べし譯文は誠に流暢平易なれども其中に譯者が深切なる苦心の跡見えたり就中長幼貴賤の言語を別たんとて又は文情の調和をはからんとて「キッド」「大した」もの「鼻が高い」「目がない」等の俗語を用ひたるが如きは殊に全力を灑きたりと見えていとめでたし行文の中に餘り多く「御」の字を用ひたるが少しく耳だてど咎むべき程にはあらず「人にいひく\しまた」「しつかり歩いてゐました」など言葉を重ねたるはおのづから優しき女教師が幼童に教ふる時の風に似たり何れも譯者の婦人たるを證してなかく\にゆかし」兎に角當今外國美文學輸入の必要あるに際し斯く原文の精神と外形とを寫し出さんと力めし飜譯の見はれしは文學のため賀すべき事なり。

正價金二拾八錢 郵稅金八錢

櫻井明石君譯

希臘孝子 **腓立比物語**

大形洋綴美製
定價金卅五錢
郵稅金六錢

今を距ると六十年希臘國の勇士等、土耳其國の壓制に堪へず義兵を擧げたりし時、一方の將となりたる、メサロスなるものの戰敗れて、其妻と共に奴隷に賣られて、遠くアラビヤのバグダッドへ連れ行れて、苦役に服しをり、其子腓立比其時六才なりしが、或人に養育せられて、十七才に至りたる時、土國より遣はされたる管領の危難を救ひしが緣となり、管領腓立比の至孝勇猛に感じて莫大の金を與へ、船を用意させて兩親を贖ひに出しやり、船中にて腓立比は船長の危難を二度助け、又船長の助言により腓立比基督信徒の身を以て、土國マホメット宗徒の假裝を爲して、單身にて隊商の群に加はり愈アラビヤの沙漠に乘り込み、沙漠中にて其基督敎徒なると露見し殆ど生命も危かりしを、隊商の頭領其至孝と堅信とに感じて、大に腓立比を省みるに至り。後又隊商等がアラビヤのベドウイン族に剽掠せられ囚虜となりし時、腓立比も、亦囚人となり、爾後幾多の艱難變遷ありて、終に酋長腓立比の志に感じアラビヤの健兒に護送させてバグダッドへゆるし遣り、バグダッドにて非常の困難に遊ひ大失望したりしも、圖らぬ助を得て遂に兩親を奴隷苦役の中より十二年目に茅出度救ひ出しぬ。

發行所 **女學雜誌社書店**
東京神田表神保町六番地

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

岡田起作先生書

かな習字帖

一冊　正價金十二錢　郵稅金二錢

方今女子書躰の衰頽せるを憂ひ之を矯正せむとて新教授法を發明せられたる岡田先生が多年の經驗により極めて習ひ易き字躰もて徒然草の中修身に關する章を書せられたる習字帖にして高等小學第三第四年級より高等女學校第一第二年級の習字科に適當の者なり尙ほ引續き逐次優美なる習字帖を發刊せんとす抑も岡田先生は現に女子高等師範學校。高等女學校。東京府尋常中學校。明治女學校。女子文藝會。立教女學校。成立女學校。等より教授を囑托せられ各生徒進步の著しきは皆人の稱道する所なり之に因りて教授の懇篤なると能書の名聲あるを知るに足れり今此習字帖世に出づ是によりて進まば奇僻に墮るの患なく優美なる域に進むの階梯たらんとす

河村墨稼君書

十體千字文

千字文講義
實語敎俗解
童子敎俗解

全一冊和裝　上等日本紙●印刷鮮明
正價拾五錢　郵稅金四錢

頃日臨池社會に一新面を出せる河村墨稼先生の十體千字文は則是也、開卷目を披けば、古なるもの、新なるもの、奇なるもの、正なるもの、書に似て文字なるもの、豪宕なるもの麗清なるもの、墨稼先生の神筆をかりて之を現す、加ふるに附錄として**千字文講義、實語教、童子教の俗解**ありて諸書百家の言を引證し、之に詳細なる解說を下し其書を學ぶもの、用に供するのみならず、又其意味の深遠なる所以を知らむ、眞に是萬能共に到るの良本也

◦文部省檢定濟高等小學校教科用◦
藤尾錄郎君著　田口卯吉君序
●實地應用 **家計簿記法** 全
正價金二十錢　郵送料金四錢

此書ハ只朝夕數字ヲダニ記入セバ一家ノ出納細大漏サズ之ヲ明ニスルヲ得セシムルモノニシテ公私ノ學校生徒ハ固ヨリ官吏、會社員、農工商ニ論ナク凡ソ一家ヲ經營スル者ハ必ズ購讀スベキノ要書ナリ

◦文部省檢定濟高等小學校教科用◦
藤尾錄郎君著
●實地應用 **家庭簿記法例題** 全
正價金十錢　郵送料金二錢

右ハ前書家計簿記ニ據リ記入法ヲ習學セントスル者ノ爲ニ例題ヲ設テ其標準ヲ示シタルモノナリ

●**日記帳**　正價金六錢　郵稅二錢
●**元帳**　正價金六錢　郵稅二錢
●**賄費仕拂帳**　正價金十錢　郵稅四錢

但三冊一トー纒メニナス時ハ郵稅金六錢

右ハ前書家計簿記法ヲ實用ナサレ候方ハ勿論又同法例題ニヨリ簿記法ヲ習學ナサレ候女學生諸君其他一般ニ簿記ヲ習熟セラレントスル方々ノ御便利ノ爲メニ調製セシモノニシテ此三帳簿アレバ一家ノ經濟ヲ容易ニ整理シ得ベク若クハ容易ニ家計簿記法ヲ習熟スルコトヲ得ベキ極メテ重實ナル帳簿ナリ

賣捌所

東京神田表神保町六番地
女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

横山雅男君著

婚姻論

目次

第壹章　總論
第二章　婚姻の定則
第三章　婚姻は人類の天性
第四章　婚姻の効力
第五章　婚姻は社會の盛衰によりて増減す
第六章　早婚上
第七章　早婚中
第八章　早婚下
第九章　晩婚
第十章　私婚上
十一章　私婚下
十二章　血族婚上
十三章　血族婚下
十四章　濫婚上
十五章　濫婚下
十六章　離婚上
十七章　離婚中
十八章　離婚下
十九章　正婚
二十章　結婚年齢
廿一章　離婚年齢の差
廿二章　男女共諸法上
廿三章　男女共諸法中
廿四章　男女共諸法下
廿五章　男女互に撰ふ事
廿六章　離婚の境界
廿七章　離婚
廿八章　結論
目次終

洋綴中本　二百三十九頁
正價　金拾六錢
郵税　金四錢

船越鼎太郎君著

産婦小兒攝生法

目次

第壹章　月經
第貳章　妊娠したるを知る法
第三章　出産期日を知る法
第四章　妊娠中の攝生法
第五章　分娩期中の攝生法
第六章　産後の攝生法
第七章　初産兒の所置
第八章　哺乳期中の攝生法
第九章　生母の乳汁を用ひずして乳兒長育法

正價　金拾錢
郵税金貳　錢

鈴木弘恭大人講述

第五版

百人一首講義

（附錄小倉てびき）

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第四版品切に成りたれば茲に第五版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〳〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

正價　金廿八錢
郵税　四錢

鈴木弘恭大人著

再版增補

文法口授

一名和文獨案内

（半紙判日本綴）

正價　金拾二錢
郵便税　金二錢

目錄

（一）文と云ものゝ譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯并に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

發行所　文學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

少年園

毎月三日、十八日發兌。定價金五錢。十二册(半年)金五十五錢。廿四册(一年)金壹圓。郵税一册金五厘。爲替拂渡局駒込郵便局

少年園は、發行以來號を重ぬる百二十六、毎號諸大家の寄草あらざることなし。新説奇文万斛の泉の如く愈々出で、愈々多し。本月十八日發行の誌上には、今の佛教社會に博學德行を以て仰がるゝ釋宗演師が筆に成る**老婆心**あり、宗教と教育との相關することを最も解し易く述べたるものなり。太華山人が**貧しき親子**は、天明年間にありし慈父孝子が狀を描きし悲愴の文字にして、抱一庵主人が**王子村舍雜話**は、已が閲歴上より文學界の裏面を寫し出したる奇絶快絶の妙篇なり。霞城山人は**菓子陳列會の記**を作りて、大に汁粉黨の爲めに氣焔を吐き、人をして垂涎三千丈たらしむ。又久しく朝鮮に在りたる岡倉由三郎氏の**朝鮮婦人の事情**は、彼地の婦人が最も慘憺たる境遇に在ることを詳述し、一讀毛髮悚怖、**生きて朝鮮の婦人たらば寧ろ死するに若かず**との感を起さしむ。山縣悌三郎は、**乘槎日記**を續けて、本號に布哇の事情を説き、人をして自ら其地に至り親しく目擊するの思あらしむ、此他珍話奇説頗る多く、特に本號に懸賞文の披露あれば、苟も學事に志すものは速に購讀せざるべからざらん。

發行所　東京府下北豐島郡上駒込村　**少年園**　(電話三百三十八番)

齒磨之大王

●品質最良芳香美粉なり

當時流行なる人造麝香入水おしろいにて美人となる至極適當の品なり

元祖

人造麝香入

定價金五錢

諸賣藥化粧品問屋　宮内省御用達　小町水本店　岳陽堂

全國中無限の取次所あり

東京馬喰町二丁目　**平尾贊平**　●電話六二五番●

女學雜誌社近刊書籍預告

ウイラード自叙傳

世界婦人禁酒會頭フランセス、ウイラード女史が、自から流麗の才筆を揮ひて、自己の生ひ立ち經歷を記したる自叙傳を、簡潔に、有益に譯述したる新書近刊せられんとす

山階宮殿下御題字
高崎正風君題歌
幸野楳嶺氏題畵

池袋清風大人選

淺瀨の波　第貳篇

谷勤君序文
税所敦子序幷歌

池袋大人世の詠歌徒らに語格の桎梏に繫れて人工の作爲に流るゝを見て慷嘆し自ら抱負する所を以て後進を薫陶せらるゝや玆に多年常に天眞の活歌を目的となし天地間の情景を初心の思想の儘に言はしめ又後進の性質によりて之を開發し充分に自然の發達を計られつゝあり故に少年少女と雖も年ならずして立派なる秀詠をよみ出づるに至れる蓋し敎授法の宜しきを得たる所以也

第一篇は既に世に行はれ畏くも九重乙夜の覽に入りしを見ても其聲價の一斑を卜知す可し今やまた大人其の社中輓近五年間の詠歌無慮五萬首及び客員の秀詠等を合せて凡そ六萬首を精選し第二篇となして世に公にせられんとす剞劂其の功を竣はる亦近きに在り請ふ其日を待つて眞價を批判せよ

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

一本誌購讀者は代價郵税共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

一本誌代價郵税共郵便小爲替にて拂渡局を必らす

一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事。

請取人は神田表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。郵便切手代用は一割増(五厘切手に限る)にて申受け候。

一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御書添への事。

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日内務省許可
明治廿七年一月十九日印刷
明治廿七年一月二十日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京北豊島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社
印刷所　牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍工場(電話十九番)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY